

夏季高温に対応するイチゴ‘まりひめ’の栄養状態管理

農業試験場 主査研究員 田中寿弥

【要約】

‘まりひめ’では、7月下旬以降に採苗した小苗の利用を避け、定植の2週間前頃に窒素中断をすることで、開花の遅れを軽減できる。また、定植後の培養液濃度が高いと分化苗の開花が早まり、反対に、培養液濃度が低いと未分化苗の開花が早まる。

【背景・ねらい】

近年、8～10月の夏秋季の高温により、本県のイチゴ‘まりひめ’産地では開花が遅れ、需要期である年内収量および総収量が大きく減少し、大きな問題となっている。そこで、開花の遅れを軽減させることを目的に、‘まりひめ’の適正な栄養状態管理手法について検討した。

【成果の内容・特徴】

1. 定植苗の大きさを比較すると、7月上旬に9cmポットへ採苗した大苗は、7月下旬に7.5cmポットへ採苗した小苗よりも、開花時期が早い（図1）。
2. 苗の窒素中断時期を比較すると、定植6週前や4週前では開花株率が低く、一方、中断なしでは開花時期が遅れる。窒素中断時期を定植2週前とすると、開花株率の低下と開花時期の遅れが軽減される（図2）。
3. 定植後に異なる培養液濃度で管理すると、花芽分化している分化苗の場合、高ECでは開花時期が早まり、低ECでは開花時期が遅れる。一方、花芽分化していない未分化苗の場合、高ECでは開花時期が遅れ、低ECでは開花時期が早まる（図3）。

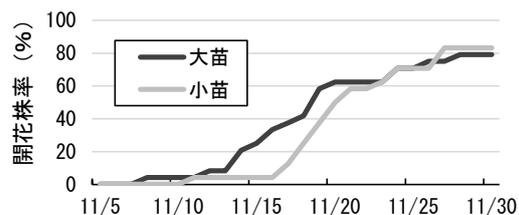


図1 定植苗の大きさが開花に及ぼす影響

注) 定植日：令和7年9月25日、調査株数：24株
大苗：9cmポット・7月7日採苗・7月28日切離
小苗：7.5cmポット・7月29日採苗・8月12日切離

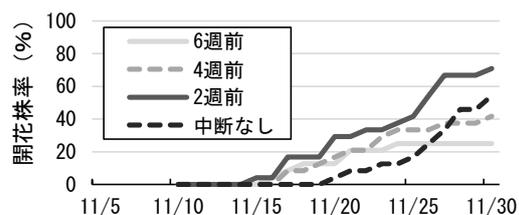


図2 苗の窒素中断時期が開花に及ぼす影響

注) 定植日：令和7年9月25日、調査株数：24株
施肥：7月31日（定植8週前）から、OK-F-1（OATアグリオ）の500倍液肥を50ml/株/回、2回/週施用

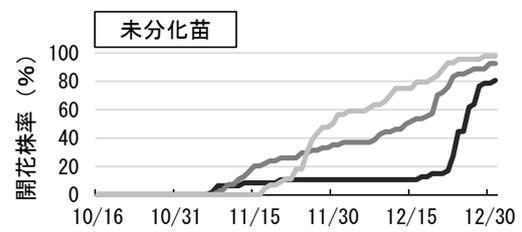
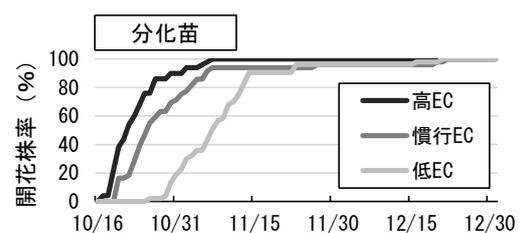


図3 定植後の培養液濃度が開花に及ぼす影響

注) 定植日：令和7年9月19日、調査株数：44～54株
分化苗：9月1日～19日に夜冷短日処理
未分化苗：自然分化
培養液：タンクミックスF&B(OATアグリオ)
EC(mS/cm)：高0.5、慣行0.25、低0.1(原水除く)
培養液処理：定植～10月30日